

# 企画協力者が考えた調査旅行のテーマ

米坂 浩昭

## イントロダクション

今回の専修大学社会科学研究所による『メコン圏視察調査プログラム』の実施に当っては、当社が企画協力をさせていただきました。本稿では、企画協力者としての視点から今回の調査プログラムを振り返り、反省点も踏まえつつ、プログラム企画に際して設定したテーマについて述べたいと思います。

まず、参考までに当社の概要を述べます。当社は日本政府や国際機関が開発途上国で行う開発援助プロジェクトの設計と実施という業務や民間企業による途上国向けビジネスを支援する業務に加え、開発途上国を舞台とする教育・研修という業務にも取り組んでいます。

教育・研修業務の中の一分野が、今回のような学術性を持った調査旅行や教育効果を目指した研修旅行です。この種のツアーは大手の旅行会社でもなかなか企画できない面があるためか、大学などから色々な依頼をいただくようになってきました。そうした調査・研修ツアーの場合、観光は副次的であり、学術調査や教育効果を重視する以上、主催者と打ち合わせの上、企画の際に毎回いくつかのテーマを埋め込む必要があります。

この度の調査プログラムでは参加者にとって有益な情報や知識の獲得にできるだけつながるように、各国別のテーマと各国間のテーマに分けて考えました。以下では、想定したテーマを具体的に挙げ、実際その狙いを達成できたかどうか、できない場合は何が原因だったかを評価してみたいと思います。調査実施中には参加者全員に明確にお伝えできていなかったこともあると思います。

## タイのテーマ

タイでの滞在はわずか1日で、テーマと呼べるほどの内容にはなりませんでした。一応、一極集中するバンコクと地方との間の格差、およびタイ・ラオス間の経済関係について情報を得る機会とできればと考えていました。そこでウボンラチャタニ大学経営管理学科のスックスム教授にテーマをあらかじめ伝えレクチャーをお願いしましたが、前者のテーマについてはちょっと物足りない結果となったかもしれません。他方、タイのウボンラチャタニ市とラオスのパクセ市の間で行われている国境貿易を核とする経済関係については、具体的な数字に裏

付けられた興味深いお話を伺うことができました。国境貿易がタイ側の入超であるというのには普段目にする光景と違い、少なからず驚きましたが、ラオスがタイに輸出している電力という眼に見えない財の重要性に気付かされました。ただ、国境貿易の経済実態を考えると、考慮すべき要素がもう一つあるように思います。それはラオス人が日常的にタイ側のショッピングモールなどで買物をしていることです。私用物としてラオスに持ち帰りますので貿易統計には反映されませんが、実際には相当な額に上っているはずで、これも目に見えない財の交易の一種でしょう。

## ラオスのテーマ

次は今回の調査プログラムの中心であるラオスです。今回はタイからラオスへ、ラオスからベトナムへと陸路で移動しましたが、そもそも陸路で国境を越えることがない多くの日本人にとっては、それ自体が貴重な経験です。しかし、それ以上に、タイとラオスの国境を越えた途端に社会的な風景が一変することから感じる「開発度」の違いのほうが印象深かったのではないかと思います。「国境の短いトンネルを越えるとそこはラオスだった」という感じです。

ついでですから、ラオスとベトナムの国境についても手短かに書きます。ベトナムもラオスと同じで「後発アセアン」グループに属する国であり、両国の国境では「開発度」の違いを感じさせるほどの差異はなかったかもしれません。しかし、良く見るとラオスでは国境に着くまで見渡す限り広がっていた天然林がベトナムでは全てゴムや足場丸太材などの人工林に代わっていることが分かります。自然林が残っているのは自然保護区だけのようです。また国境では、のんびりしたラオスの出入国管理官と厳格なベトナムの管理官の雰囲気の違いを感じることができたかもしれません。ベトナムへの入国に時間がかかったのは、5回もパスポートをチェックされたからです。ラオスでは考えられないことです。

ラオス国内では、日系を含む外資の進出と地域社会の関係、一村一品運動などの地場産業振興、少数民族の現状などを調査のテーマとしました。ラオスでの2日目は大嵐になってしまい、ボロベン高原の日系企業が経営するイチゴ園には行くことができませんでした。注目されている事業だけに心残りでしたが、翌日はセコン県のアスパラガス農園を予定通り見学することができました。日系企業がラオスのこんな僻地でアスパラガスを栽培していて、私たちが普段それを日本のスーパーで気にも留めずに買っているというのは不思議な気がしますが、紛れもない事実です。セコン県は少数民族が人口の大多数を占める県です。農園労働者もみな少数民族の人たちであり、日系企業の農業進出が、彼らの社会に経済的にも社会的にも変容をもたらしていることは間違いありません。参加者にはその具体的なイメージを持っていただけたと思い

ます。

次に一村一品運動の関連では、先のイチゴ園も一村一品プロジェクトの支援を契機に始まったものでした。イチゴ園は行けませんでした、ホアイフンタイ村という織物を生業とするカトウ族の村を訪問し、地場産業の振興策としての一村一品運動を視察できました。ホアイフンタイ村では、その日、数少ないお客さんが雨の中をやってきたということもあり大盛況というか大混乱の売買シーンとなってしまいました、彼女たちが今売っている商品のなかには、一村一品プロジェクト以前にはなかったものが少なくありません。村内の生産者の数も一人当りの所得も確実に増えましたし、大枠としては成功プロジェクトの一例と言ってよいと思いますが、開発の視点からより専門的な考察が可能だという気がします。

ラオスにおける3つ目のテーマは、少数民族の現状でした。ラオスはラオ族だけで成り立っているわけではなく、特にメコン河沿いの「表ラオス」からベトナム国境に近い「裏ラオス」に入れば入るほど、少数民族が多くなります。ピエンチャンやパクセなど「表ラオス」を訪れることがある人でも「裏ラオス」にはあまり来ることがありませんし、少数民族の村となると尚更です。今回訪問できたのはカトウ族の二村だけです、専門的な調査や研究には材料不足でしたが、もう一つのラオスを垣間見ていただく機会にはなったと思います。

## ベトナムのポイント

今回、ラオスを抜けた後コンツム経由でダナンまで移動したのには訳があります。ダナンに早く着ける別の道がありましたが、それを使わなかったのは、ベトナム側でもカトウ族を含む少数民族の村を訪問し、ラオス側の村と比較できれば興味深いと考えたからです。しかし、この企画は事前の合意が取れず、実現しませんでした。参加した方々は、ダナンへ向かう途中、近代建築としてのスピリットハウスを見たのを覚えていると思いますが、その辺りに目指すカトウ族の村はありました。3ヶ月ほど前、私が下見に行き村長に会ったときには、どうぞという感じでしたが、その後になって村から、「訪問者一人につき80ドルを支払って欲しい」という要請がありました。この村は、日本のNGOがJICAの補助金を得て、Community-based Tourism Development Project を実施した村でした。観光客に伝統的な踊りを見てもらったり、民族料理を提供したりして、観光で村興しをしようとしたわけです。実際に観光客が来るようになりました。特に日本人は良い客となったようですが、それが今回は裏目に出たようです。訪問して30分か1時間ほど村の現状についてあれこれ質問したいとお願いしていたのが、いつの間にか踊りや料理を出すので料金は一人80ドルですという話に変わってしまい、そもそもそんな時間も予算もないため、訪問を諦めざるを得なかったという次第です。

もう一つ、背景にあったのが少数民族の村落に外国人が入ることを警戒するベトナム政府の姿勢です。中部高原地域はベトナムの主流民族であるキン族への反感がくすぶり、2001年には今回訪問できたバナ族の人々も加わった暴動が実際に起っています。昨今、中国との国際関係が悪化する中で、ベトナムの治安当局は外国人が少数民族に分離主義を扇動する可能性があると考えているようです。ですから、ベトナムではラオスでのように少数民族の村を気軽に訪問することはできません。

(ただ私はこの差は政治というより文化に因るのではないかと密かに思っていますが・・・)

ベトナムでは、発展著しいダナンについて知見を深めるというテーマもありました。このテーマは限られた時間の中、初期の目的を達成できたと思います。海岸リゾートやシーフードレストランの活況を経験できましたし、日本語堪能な市の開発担当者の率直なお話も伺えました。最終日の朝には、(普段より静かでしたが)そこそこ活気ある漁港を見学し、ダナン経済の別の一端に触れることができました。

ベトナムの最後のテーマは、フランスとベトナムというかインドシナとの歴史的な関係でした。辛うじて、コムツムの木造教会と刑務所跡地を訪れ、フランス統治の麗しさとおぞまじさを胸に刻むことができました。南部ラオスでもフランス時代の痕跡を探したのですが、見つけれませんでした。長い時間の流れと同時に、フランス植民地主義がラオスへそれほど関心を持っていなかったことも、その一因かもしれません。私の勉強不足もあって、今回の諸テーマの中では一番難しいテーマでした。

## 最後に

今回は東北タイから南部ラオス、そしてベトナム中部高原地帯からダナンへと3カ国を陸路で回る大変ハードなスケジュールでした。しかし、それだけに一つの国や地域だけを見るのとは違った発見があちこちにあったのではないかと思います。特にラオスのような小国をラオスだけの視点から見るのは、今やあまり科学的とは言えないと感じます。タイとの関係、ベトナムとの関係、中国の関係のなかに位置づけてラオスを考察することの必要性は、今後増すことはあっても減ずることはありません。経済だけ見ても、ボーダーレスな経済活動の実態的な進行を、政府がアセアン共同市場など政策面でも後押ししていますから、もはや不可逆的な流れです。インドシナの地域大国であるタイですら、ラオス、カンボジア、ミャンマーとの関係抜きには経済が成り立たない段階に入っています。

そうだとすれば、今回のような調査旅行のニーズは今後、増えて行くはずで。当社にとっても、私個人にとっても、学びの多い旅であった今回の調査プログラムの経験を糧に、例えば

バンkokから中国昆明に至る南北回廊ツアーなど、インドシナ地域のダイナミズムを経験できるツアーをさらに充実していきたいと考えています。

今回の企画プログラムでは至らない点多々ありました。我慢してお付き合いいただいた参加者の方々とそもそもこの機会をいただいた専修大学社会科学研究所の方々に心より御礼申し上げます。